忘れられない東京大空襲

松崎絹子（本町・62歳）

私が生まれ育った所は、江東区深川高橋一丁目四番地。あの東京大空襲を忘れる事ができない。毎夜の様に空襲はあった。高射砲の音、爆弾の投下された様な戸がはずれるかと思われる振動、もう恐ろしくて枕を高くぐっすり眠る事はなかった。寝巻にはならず、いつも防空頭布をそばに置いて布団に入る。当時私は十七才。女学校から、父が工場に動員されて危ないからと三年で退学。日本製糖と言う藤山愛一郎氏が社長で、その会社の株式課に入ってソロバンを動かしたりお茶くみもしたりしていたところを、その神田にあった会社に動員が追っかけてきて、女子挺身隊員として有楽町の交通局に勤務していた。昭和二十年三月九日の夜、、ラジオで空襲警報が出てすぐ庭の防空壕に入る。しかし、いつもと違うすさまじい爆音と高射砲、そして逃げる人。私の家の前を逃げてきた人が水を下さいと玄関にバケツに水を入れておいたその水を飲んで逃げて行く人達。父はいつも言っていた「こんな下町は何にも無いからやられない。」そんな言葉はくつがえされ、もうすぐ目の前、五十米先の深川幼稚園が赤く燃え始めた。父は「早く風上に逃げろ。」と、母と五人の姉弟はリヤカーに布団と身の回りの物と煎り米等入った袋を手に逃げた。父は隣組の組長をしていたので残った。私達は、両国の方へ風上へ風上の方へと行ったが、途中の防空壕に苦しくて恐ろしくて入ってしまおうかと何度も思ったが、中学一年だった弟は、「駄目だ、そんなところへ入っちゃ。」と母や私はとめられ、リヤカーを押しながら火災から起きる強風、夜中でありながら真昼間の明るさ、三方が火の海になりそうな時だった。私達は、一団体ができていた。「みんな座って、前の人の火の粉を払い落としなさい。」と大きな声、前の人の頭や背中を手の平で火の粉を払い落とすのに必死だった。そのうちもうリヤカーはサナダひもがほどけて車輪に巻きつき動かなくなってしまい捨てた。

もう夢中で母と五人の子ども達は、その二十人位の小さい団体になった後の方で、いよいよこのままでは火が迫ってくる。屋根、物干し台が火の付いたまま燃えながら飛んでいる。私はその時、もう地獄、これで日本はなくなると思った。恐ろしくてただ一番下の弟の名を「義雄ー、義雄ー。」とどなりながら持っていた布団を頭からかぶり、森下町から緑町の両国駅のガードの側まで、広い電車通りを強風にあおられ今にも飛ばされそうになりながら向こう側に渡った。

向こう側は緑町、右の一角がこれ又不思議と焼けなかったのだ。そこに逃げて来た人は、正確に何十人何百人いたか解らない。目の前の銀行、食堂、少し入ったところに国技館も、焼け落ちる時は私達の身体が熱くなる程だったが、電車通りで道幅が広かった事と風の向きがうまくいってこち

らに引火しなかった事で私達母子が助かったのだ。

見渡す限り三方は焼野原になった。朝何時だったか、焼けただれた気の毒な人がリヤカーに乗せられて息もたえだえの人、赤ん坊は死んでしまったのではないかと思われるオンブをしている女の人、顔が真赤で頭に鍋をかぶって着物も真黒くなった人が夢遊病者の様にはだしで歩いて来る人、次々と通っていった。私達は父親が心配で、我が家はどうなったかと行ってみようとしていた時、見知らぬ人が一番下の弟、四月から一年生に入る時でまだ身体が小さかった。その弟にみかんを一つくれた。「ありがとう。」私は涙が出てきて留らなかったのを今でも憶えている。

私とすぐ下の弟と、家の方へ見てくるからと言う事で歩き始めた。深川はどこまでも焼野原になり、真黒な人形が道路に幾つも幾つも転がっている。それがみんな人間である事が解った時の恐ろしさは体験した人にしか解らない。思い出したくない光景だった。途中でコンクリートの用水桶をのぞくと、又人が死んでいるのだ。「アアー、お父さん。」声にはならず、二人は父に会えずに帰ってきた。もう駄目だ。父も死んでしまったと思った。弟が「うちのリヤカーがある。」と言ってちょっとかけ合ってくると、弟はうまくリヤカーを返してもらう事ができた。火の粉をかぶった布団二、三枚をリヤカーに積み、小さな風呂敷包みを幾つかのせ、母のいとこの駒込のおばさんの家に歩き出した。

上野の山の近くでは焼けていないで、国防婦人のたすきをかけた人達がお水かお茶をご馳走してくれた。どんどん歩いて、焼けない町は電車が通っていた。やっとの思いでおばさんの家に落ち付く事ができた。しかし私達は恐ろしい焼夷弾の雨・B29の爆音と熱風に舞い上った屋根、あの下町の様子のショックで誰も口を開かない。みんなただ茫然となった。満で十八才の姉、十六才の私、十四才の弟、その下の妹は学童疎開で新潟に行っていた。その下に九才の弟と六才の弟、そして母、おばさん一家は親切にいろいろ面倒をみてくれました。又焼跡に駒込の住所を書いて建てた。一週間が過ぎ、いよいよあきらめなければならないかと思っていたところへ、父は前回焼け落ちた銀行の金庫の中で助かったと言う。しかし、目がやられ、手もやけどをしてしまい、親切な人に病院へ連れて行かれ、みんなも助からなかったのではないかと半分あきらめていたと聞いた。私達一家は全員無事で大喜びをしたが、隣組のお豆腐屋さん一家、帽子屋さん、味噌屋さん全滅、巡査だった一家はご主人が勤務中で助かり、奥さんと二人の坊やは橋のたもとで発見されたが駄目でした。と父が会って聞いたと言う、もう戦争はイヤだ。兵隊だけではない、銃を持たない人間まで犠牲になるのだ、八月には広島、長崎と、まるで実験の為に使った様な原爆。そして終戦。一夜乞食になった。三月十日から三代続いた表具師も仕事はなく、働らいても働らいてもインフレの為弟達は学生だったので私達は苦しかった。日本中のみんなが大変だった時代と言ってよいと思う。もう戦争だけはやらないで下さい。

今の平和は沢山の犠牲の上になりたっている事を、日本人は忘れてはいけないと思う。